

# 雲南・鷄足山の仏教

鎌 田 茂 雄

## 一 序

中国には四大仏教聖地といわれるものがある。それは山西省五台県の五台山、四川省峨眉県の峨眉山、安徽省青陽県の九華山、浙江省普陀県の普陀山である。

これらの中国仏教の四大聖地がいつ頃生まれたのかははっきりしないが、恐らくは明・清時代になってから四大霊山とか、四大聖地とかいわれるようになったのではないかと思われる。それは仏教信仰者の聖地巡拝の願いを受け入れ、観光と巡礼をかね合わせたものとして盛んになっていったものであろう。

四大霊山といわれるようになったのは、五台山が文殊菩薩の、峨眉山が普賢菩薩の、九華山が地藏菩薩の、普陀山が観音菩薩の聖地としてそれぞれ結びつけられたからである。

この四大聖地以外にも仏教名山としては千山（遼寧省鞍山市）、天台山（浙江省天台県）、天童山（浙江省寧波市）、廬山（江西省九江市）、鷄足山（雲南省賓川県）、泰山（山東省中部）、棲霞山（江蘇省南京市）、梵淨山（貴州省東北部）、雪竇山（浙江省溪口鎮）、嵩山（河南省登封市）、鼓山（福建省福州市）、衡山（湖南省衡陽市）などがある。これらの仏教名山の一つが鷄足山である。

鷄足山は雲南省の西北部にあり、賓川縣、大理縣、鄧川縣、永勝縣、鶴慶縣が互に境を接する地点にある。山域は東西七キロ、南北六キロに及び、主峰は天柱峰で三二四八メートルある。その他文筆、象鼻、満月など四十余山、十三峰より成る。山中には三十四の石壁、崖窟四十五、溪泉百余があり、古木は苔生し、草花の芳香が満ち、危崖には嵌めこまれた珠玉のように寺廟が点在している。

全体の山形が前列に三つの嶺、後方に一嶺を抱き、あたかも鷄の足の形に似ているため鷄足山の名があるといふが、この中国の鷄足山の源流になったのは、仏教史の上で有名なインドの鷄足山である。

インドの鷄足山は Kukkutapada-giri の訳語であり、摩伽陀国にある山で鷄脚山とも訳されている。迦葉（マハーカーシヤパ）が入定した場所として有名である。

『高僧法顯伝』には

此より南三里にして、一山に到る、鷄足と名づく。大迦葉今此の山中に在り。山を攀きて下り入るに入処容れず、人下り入るに極遠に旁孔あり、迦葉の全身、此の中に在りて住す。孔外に迦葉の本と手を洗いし土あり、彼の方の人若し頭痛せば、此の土を以て之を塗るに即ち差ゆ。（中略）此の山は榛木茂盛し、又師子虎狼多く、妄りに行くべからず。とあり、迦葉入定の地として述べられている。また玄奘の『大唐西域記』巻九にも、

高巒陷として極まりなく、深壑洞として涯りなし。山麓谿澗、喬林谷を羅り、岡岑嶺嶂、繁草巖を被う。峻起せる三峰は傍挺絶崿、氣將に天に接せんとして形、雲と同じ。其の後尊者大迦葉波、中に居りて寂滅す。敢て指言せず、故に尊足と言ふ。

と述べられており、迦葉がこの山で寂滅し、その山が尊足山と呼ばれていることが記されている。

仏弟子摩訶迦葉が中インドの摩伽陀国の鷄足山において入定し、弥勒の出世を俟つとの伝説は有名であるが、中国ではその鷄足山がすなわち雲南の鷄足山として信仰されているのである。

以下、この鶏足山の仏教寺院や高僧について述べることにしたい。

## 二 中国仏教と摩訶迦葉

摩訶迦葉 Mahākāśyapa は摩訶迦葉波、大迦葉、大迦葉波などともいわれ、略して迦葉という。大飲光、或は大亀と訳されている。仏の十大弟子の一人である。大迦葉種の出であるため摩訶迦葉と称せられた。十二歳の時父母の喪に遭って、出家剃髪し、仏の弟子となって教化を受け阿羅漢果を證したという。迦葉は少欲知足にして常に頭陀を行じ、教団の上首として尊敬され、仏の深く重んずる所となったという。『增壹阿含經』卷三弟子品では、「十二頭陀、難得の行は所謂大迦葉比丘是れなり<sup>③</sup>」と説かれており、また『雜阿含經』<sup>④</sup>卷四十一には、迦葉が久しく舍衛國阿練若床坐処に住し、鬚髮長く生じ、弊納衣を着して仏の所に來詣した時、大衆は迦葉の衣服が龜陋にして儀容なきを見て、輕慢の心を生じた。その時、仏は諸比丘の心を知り、迦葉に告げて、善く來た迦葉、この半座において坐せよ、と言った。時に諸比丘は心に恐怖を生じて身毛皆豎ち、迦葉に大徳、大力があることを知った。仏はさらにまた諸比丘を驚悟させようとして、迦葉の所得は仏の広大な功徳と同じことを称歎されたという。

迦葉は波娑城よりの帰途、仏の入涅槃を聞いて、拘尸那城天觀寺に到って仏足を拜し、荼毘の儀に参列し、ついで五百の阿羅漢を集めて、自らその上首となり、阿難及び優波離をして經律を結集せしめたという。その後迦葉は法を阿難に付し、仏から授かった糞掃衣を着し、己れの鉢を持って摩揭陀國の鶏足山に登り、三岳の間に草を敷いて坐し、弥勒の出世を念じつつ捨命したといわれる。古より迦葉をもって付法藏の第一祖とし、とくに禪宗においては拈花微笑の故事を伝えて迦葉を尊崇してきたのである。

拈華微笑の故事とは、仏が靈山会上において華を拈じ給うに、八万の大衆中、独り摩訶迦葉のみがその意を理

解して破顔微笑したことをいう。悟明の『联燈会要』巻一に、

世尊は靈山会上に在り、花を拈じて衆に示す。衆皆默然たり。唯迦葉のみ破顔微笑す。世尊言わく、吾に正法眼藏、涅槃妙心、実相無相、微妙法門、不立文字、教外別伝あり、摩訶迦葉に付嘱す。

とあるのが禅宗の拈華微笑の説話である。この説話は宋代以後、禅林において喧伝された説話であつて、『大梵天王問仏決疑經』（続藏經第八十七冊、補遺、印度撰述經部）にもとづくといわれており、この經の初会「法付嘱品」に世尊拈華の事を詳説しているが、この經は日本の禅宗徒が『人天眼目』の記事に基いて妄作した偽經であつて信用することができないものである。

このような説話が宋代以後に作られたのは、仏が摩訶迦葉に正法を付嘱したという『大般涅槃經』巻一の記事にもとづくと思われる。同經巻二には、

仏諸比丘に告ぐ、汝等是の如きの語を作すべからず。我れ今有らゆる無上の正法を悉く以て摩訶迦葉に付嘱す。是の迦葉は当に汝等の為に大依止と作るべし。猶お如来が諸の衆生の為に依止処と作るが如く、摩訶迦葉も亦復た是の如く、当に汝等が為に依止処と作るべし。

とあり、これによつて後世、拈華微笑の説話が作られたのであろう。

摩訶迦葉が鷄足山に入つて入定し、弥勒を待つ傳説は中国にも伝えられた。たとえば、北魏の吉迦夜・曇曜が訳した『付法藏因縁伝』巻一には次の如く述べられている。

是に於て阿難、阿闍世王と共に鷄足山に向う。王既に到り已れば山自ら開闢す。迦葉中に在りて全身散ぜず。曼陀羅花を以て其の上を覆う。王是を見已りて声を発して號哭し、拳身投地し、諸の香木を積み、之を闍毘せんと欲す。阿難問うて言く、何等を作さんと欲す。答えて曰く、耶旬（耶維）せんと欲す。阿難言いて曰く、摩訶迦葉定を以て身を住し弥勒を待つ、焼くことを得べからず。弥勒出づる時、当に徒衆九十六億を將いて此の山上に至り迦葉に見えん

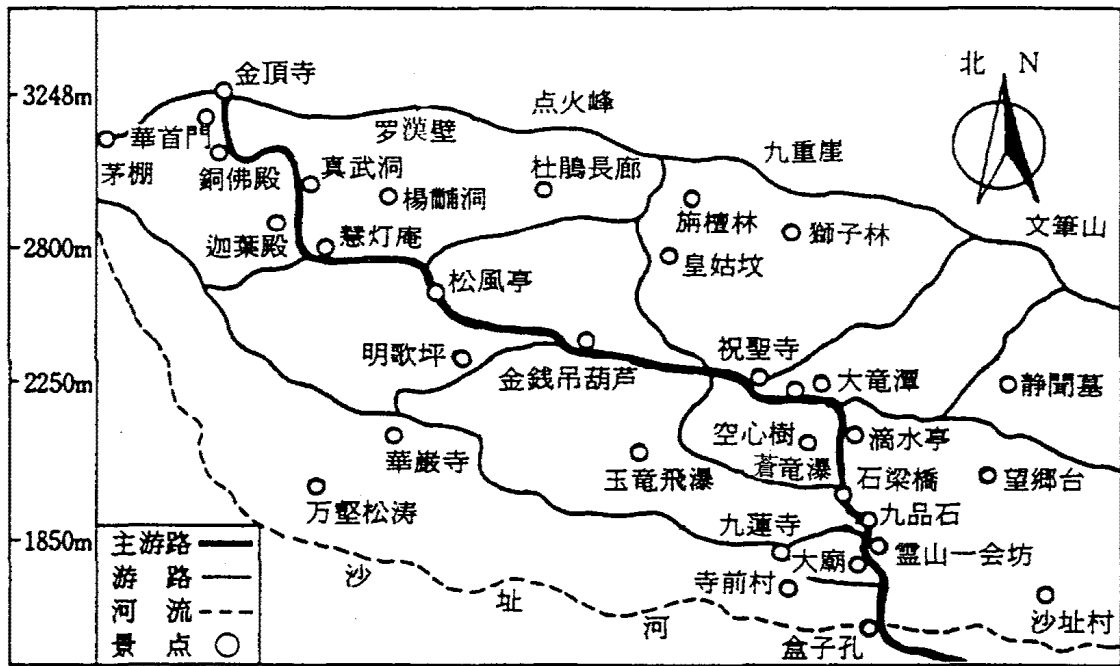
と。

時に弥勒衆、皆な是の念を作す。釈迦如来の弟子、身形卑陋なること此の若し。彼の仏亦た当に斯と異なることなし。是に於て迦葉、身を虚空に踊らせて十八変を作し、變じて大形となり世界に充滿す。時に弥勒仏、即ち迦葉に就て、僧伽梨を取る。是の時、大衆、其の神力を見て、憍心を除いて阿羅漢と成れり。王供養し已りて、本国に還歸す。時に鶏足山還た合すること初の如し。<sup>(7)</sup>

この迦葉が鶏足山で入定した伝説は、その後禅宗以外の天台宗の立場から書かれた仏教史である『仏祖統紀』巻五にも次の如く述べられるに至ったのである。

即ち雞足山に住いて、草を取りて座に敷き三願を發す。「一には、願わくは此の身及び所持の衣鉢、俱に壞せずして、待ちて慈氏の下生に至らん。二には、願わくは滅尽定に入り已って、三峰を一に合せん。三には、願わくは阿難・闍王若し至らば、願わくは山暫らく開かん」と。時に闍王は屋梁折れると夢みる。王は覺め已りて悲歎し、即ち雞足山に往いて、迦葉の全身、儼然として定に在るを見て、王は声を發して哀哭し、諸の香木を積んで、之れを闍維せんと欲す。阿難言を為して「迦葉は定を以て身を住し、以て弥勒を待つ、焼くことを得べからず」と。王は供養し已りて本国に還歸するに、山合うこと故の如し。慈氏三会の後に至りて、無量の憍慢の衆生有りて、將に此の山に登るべし。慈氏彈指するに、山峰即ち開く、迦葉は所持の衣を以て慈氏に授与し奉り、致辭礼敬し畢りて、身を虚空に涌し、諸の神變を示し、化火身を焚き、乃ち寂滅に入る。<sup>(8)</sup>

この迦葉が入定した鶏足山はインドの鶏足山であったが、禅宗の伝播とともに、この伝説の鶏足山が中国にも存在すればよいという願望とが重なり、やがて雲南の鶏足山が設定されるに至ったのである。



鷄足山全図

### 三 鷄足山の寺院

鷄足山の寺院については『鷄足山志』巻四、寺院上下や、賓川県志編纂委員会編『鷄足山誌』（雲南人民出版社、一九九一年六月）によってその概略を記述しておきたい。

#### 金頂寺

金頂寺は天柱山四観峰の頂上にある。明の弘治年間（一四八八―一五〇五）、ある僧がこの地に庵を建てた。嘉靖年間（一五二二―一六五）、大理の李元陽が普光殿を建立した。

明の万曆二十八年（一六〇〇）、御史の孫愈賢が僧人の要請に応じて、七層高さ十丈の光明宝塔を創建した。

万曆四十七年二（一六一九）、直指使潘浚が観風閣を建立。天啓七年（一六二七）、直指使朱泰が天長閣を建て、崇禎十年（一六三七）、直指使張風翽が善雨亭を建てた。ちなみに直指使とは、明の崇禎十七年（一六四四）三月、李自成の農民軍政府が、明の十三道御史を改名して設置した官名であるが、ここではそれ以前の人にも用いてい

る。

寺の周囲には磚で垣根が築かれて城廓のようになり、四方にはそれぞれ門樓が設けられた。四方の門樓は泰山の日觀を模して、東は日觀、南は雲觀、西は蒼山、洱海を眺望できるので海觀、北は遙かに玉竜雪山が見られるので雪觀と名付けられた。鷄足山の四觀の名はこの時より始まるといわれる。

張鳳翽が巨大な建物を建てたが、黔国公沐天波は昆明の東郊の鸚鵡山の大和宮の銅鑄の金殿を頂上に遷置した。その時、李元陽が建てた普光殿を廃して、その地所に金殿を建立した。それによって寺名は金頂寺に改名され香火が絶えなくなった。

崇禎十二年（一六三九）、直指使涂必泓は景星亭を建てた。清の順治十一年（一六五四）、殿宇が頽廢したので全山の耆宿と住持自玉は重修にふみきり、觀風閣の旧址に広殿を、天長閣を廢して伽藍殿とし、阿難殿を廢して藏經閣とした。高僧広称はこの藏經閣において大藏經を閲したという。さらに善雨亭を廢して臥竜軒としたが、康熙三十年（一六九一）、山頂の殿閣すべて火災を受け、ただ銅鑄の金殿と塔のみが残った。

康熙三十一年（一六九二）、雲貴總督范承勳、提督諾穆図が上山し、僧に尋ねたところ、僧は山頂は火星に属するから光明宝塔を建てて以後、しばしば火災にあったので、塔を壊して新閣を建てることを要請した。苑承勳は僧の要求をいれて、諾穆図とともに捐資百金を出して天一閣を觀風台の旧址に建立した。

一九二九年、雲南省政府主席竜雲が上山し、僧の要請に応じて光明宝塔の址に楞嚴塔を建てることに同意、百萬元の経費を支出、一九三二年に着工し、一九三四年に竣工した。塔高四十メートル、方形密檐式の十三層の塔が、今なお金頂に屹立しているのである。

解放後の一九五二年、一九六三年、金頂寺は修理されたが、文革で破壊され、銅鑄の金殿も壊されてしまった。一九八〇年、大修理が行われ、大殿には釈迦像が祀られ、靈官殿の旧址に弥勒殿が建てられ、両側には禪堂、

客堂が整備された。大門の外には曙光台が設けられ、蒼山や洱海を遠望することができる。

### 祝聖寺

鷄足山の中で最も大きな寺院は祝聖寺である。鷄足山が開かれて八百年余り、その間に山中には多くの寺院が開創された。民国二十年（一九三一）に報告された「鷄足山寺廟住持和尚人数財産表」によると、当時、寺院二十六カ所、全山の和尚四百三十三人、その中で祝聖寺が最も多く五十四人と発表されている。

祝聖寺は原名を迎祥寺といい、鉢孟山を背に山裾に抱かれるように建ち、又の名を鉢孟庵という。明の嘉靖年間（一五三一—一五六六）沈塗が創建した。万暦五年（一五七七）に有名な思想家である李卓吾（一五二七—一六〇二）が雲南の姚安太守となったとき、鷄足山に遊び、鉢孟庵に滞在し、「鉢孟庵聽經喜雨」「念仏堂答問」などの詩文を著わしたという。

清の光緒三十一年（一九〇五）、虚雲和尚が上山したときは、清の嘉慶（一七九六—一八二〇）ごろから無人となっていた寺は見るかげもなく荒廃していた。虚雲和尚は鷄足山の仏教の衰退を歎き、復興の悲願をたて、迦葉道場を復興し、迎祥寺の拡張重修に努め、十方叢林の創立を目指した。また資金を勧進するため、自ら錫杖を突いて全国を行脚した。光緒三十二年（一九〇六）、北京に到り、帝に「竜藏」の下賜を奏請した。光緒帝は虚雲が復興した迎祥寺に「護国祝聖寺」の寺号を賜り、「大藏經」も下賜された。これにより祝聖寺は鷄足山一の十方叢林の大刹として隆盛を誇った。

新中国成立後の一九五二年と一九六三年、二度にわたって政府は資金を出して寺を重修したが、文化大革命で祝聖寺は徹底的な破壊を受けた。その後一九〇八年に、政府は再び復興資金を出して祝聖寺の復旧重修に努めた。一九八四年四月には、國務院は祝聖寺を漢族地区仏教全国重点寺院に指定した。鷄足山には多くの寺があるがこ



の祝聖寺が全山の中心となり、各種の仏教法会が行われ、中国南方地方における十方叢林の使命を果たしている。祝聖寺の寺域には古木が繁茂し、寺の朱塗りの柱は緑蔭と映じ合っている。竜の飾りのある高大な山門を入ると、右手に、高さ三丈幅十丈の大照壁があり、壁面いっぱいには「鶏足山全景図」が描かれている。照壁の前面には半月形の放生池があり、池中に鎮宝亭と呼ばれる八角亭がある。この八角亭と両岸を結ぶ二つの橋も池の周りにも白大理石の欄干がめぐっている。放生池を渡って正面の十段ほどの石段を上ると天王宝殿がある。入口の上には中国仏教協会・趙朴初会長の書を彫った「祝聖寺」の金貼りの大扁額が掲げられている。門の両脇には金剛杵をふりかざした金剛力士が、殿内には四天王が祀られている。

大雄宝殿は祝聖寺の中心建築で二層屋根の雄渾な大殿堂である。屋頂には宝鼎が飾られ屋根の両端は高く反りあがっている。柱、門窓、斗拱、壁などには、大理白族の工匠が彫った民族建築様式の彫刻で飾られている。殿内の梁には孫中山の「飲光儼然」、梁啓超の「雲岳重輝」、趙朴初会長の「大雄宝殿」の名筆を金箔で貼った大扁額が掲げられている。

大殿の中央には結跏趺坐した釈迦牟尼像、その両脇に迦葉、阿難の二弟子侍立像、前面にビルマから送られた白玉石の臥仏が祀られている。仏座の背面は南海普陀の勝境の中に立つ観音像である。周囲の壁面には、上・中・下三段に五百羅漢の塑像が並んでいる。この千姿百態の羅漢像は、昆明筇竹寺の有名な羅漢像を模したものだといわれている。

殿前の両側に鐘楼と鼓楼が建つ。鐘楼の上層にはかって重さ五千斤の大吊鐘があり、その音は朝夕、鶏足山の山谷に響きわたったという。下層に南海普陀山の全景図の塑像があり、鼓楼の上層に大太鼓、下層には玄奘三蔵取経図が彫られていたという。

大殿の背後に仏教経典を貯蔵した「蔵経楼」がある。「蔵珍楼」には寺中の珍貴文物や、有名書家や画家の名品

が保存されていたが、これら伝来の宝物のほとんどが文革で焼かれたり散佚してしまったりした。藏経楼の階下は雨花台で、虚雲、太虚、自性などの和尚が、衆僧に講義、説法したところである。

楼の前後に回廊があり、東側の回廊は碑林で、鷄足山中の寺院から集めた古碑が壁に鑲嵌されている。西廊は功德林で、復興のための寄進者の名が刻まれている。

東西両側に四殿、四堂がある。四殿は祖師殿、薬王殿、地藏殿、伽藍殿である。祖師殿には達磨大師、薬王殿には薬師仏、地藏殿には地藏菩薩、伽藍殿には護法伽藍神を祀っている。四堂とは禅堂（坐禅堂）、齋堂（食堂）、客室（接客堂）、雲水堂（遊行僧の宿泊所）である。

このほか、方丈室、静室、僧舎、旅客宿舎があり、内外の庭院には長い回廊があり、洞門、花壇、茶座が設けられている。庭には花木が繁茂し、その中に小径がめぐっている。

### 伝灯寺

伝灯寺は銅瓦殿のことであり、今は銅仏殿と称されているが、原名は迦葉寺という。寺は獼猴梯の下にあり、寺の左側に青色で白紋があり、条片の明瞭な形が袈裟の条紋に似ている大石が突起しているので、これは迦葉尊者が石の上に衣を晒した痕跡といわれ、袈裟石と称されている。

寺の右は華首門に接しているが、伝説によれば華首門は迦葉入定の処であるから迦葉寺と呼ばれたのである。

明の正徳年間（一五〇六—一五二二）、僧円成と永勝、および土官高世懋が寺を建てた時、風雪を防ぐため銅と瓦を用いて建造したので銅瓦殿と名付けられたという。万暦年間（一五七二—一六一九）、中丞唐時英と李元陽が扩建した。文革後の一九七九年に重修された。大殿には中央に燃灯仏、両側に文殊、普賢、達磨、伽藍神の塑像がある。そのほか禅堂、客堂がある。一九八三年、国务院は全国重点寺院に指定し、宗教活動の開放寺院の一つ

とした。

## 太子閣

太子閣は銅仏殿の西北の断崖の下にある。この地は伝説によると迦葉が入定した華首門であるといわれる。明の嘉靖四年（一五二五）、僧昌玉と阿国楨が鉄瓦殿を再建、明の万曆二十七年（一五九九）、僧性来が周懋相の募縁の功德によって華首門の前に飲光双塔を建立した。この双塔は高さ各々七・七メートルで左右対峙しており、その中間に太子閣がある。太子閣は清末に僧可禪が慕化修建したものである。その内部に銅鑄の太子像一尊を祀っている。

華首門の左右にある泉水のうち、左の泉水は全鷄泉と呼ばれ、毎日小鳥が飛来して水を飲みにくるが、遊客はこの泉水で眼を洗うので眼薬泉とも呼ばれている。右側の泉水は受記泉といわれ、迦葉尊者が僧に授記したところといわれる。

華首門は鷄足山の中でも聖地であり、国内各地の名山大刹の僧たちが華首門に参拝する時、頂上の小樹を選んで禅杖を作ったという。

## 九蓮寺

九蓮寺は山麓の靈山一会坊の西にある。明の嘉靖年間（一五二二—一五六五）、接待寺を造り、僧の住居とした。万曆三十八年（一六一〇）、僧無為が寺を建て、徒弟の紫真、覚用が増建し、順治十四年（一六五七）、僧本湛が重修し、その後康熙三十年（一六九一）に四川の僧が住した。

文革で破壊されたが修復され、大雄宝殿、禅堂、客殿などが復興された。

### 迦葉殿

迦葉殿の原名は袈娑殿であり、挿屏山中腹の断崖上にある。

明の永楽年間（一四〇三―二四）、道人がここに草庵を修建、成化年間（一四六五―八七）草庵は廃絶したが、嘉靖三十一年（一五五二）、僧円慶が鄧川土官阿子貴の募化によって寺を建て、さらに傾圮、阿国禎の募化により重修し、万曆四十年（一六一二）、阿岑が増修した。また僧洪詔が姚安土官高風の募化によって大殿前に万仏塔を修建した。この万仏塔は高さ八・六メートルで万仏を鑄造し、外は金箔で飾った。清の順治十四年（一六五七）天咫楼が建てられ、藏経楼の機能を果し、明の南蔵が保存された。

大殿には木彫の迦葉尊者像が祀られている。迦葉殿は断崖の上にあるため、登山者の小憩所となっている。

### 石鐘寺

石鐘寺は仙鶴山の下にある鷄足山の古寺である。明の永楽年間（一四〇三―二四）、正統年間（一四三六―四九）、大少林寺僧了通、了暎が重建、弘治年間（一四八八―一五〇五）に僧円明が再修し、万曆年間（一五七三―一六一九）、僧円輝が毘盧閣を建て、清の康熙九年（一六七〇）、僧洪舒、広睿が殿閣を重建し、一六九一年に姚安土官高翮映が、弥勒殿などを建てた。

石鐘寺は地勢が開けた平坦な地にあつたので、次第に拡張され大建築群を形成した。門外に石彫の大獅子一対があり、大門は竜鳳や花紋の彫刻で飾られ、両脇の対聯には次の文字が書かれている。

石鐘无声有声皆幻

如来有像无像是虚

極めて禪的な意味をこめた文言である。大門を入ると中軸線上に天王宝殿、弥勒殿、大雄宝殿、雨花台、後閣が位置し、弥勒殿の前方の左右に鐘楼と鼓楼がある。

大雄宝殿には三世仏が祀られ、東西の大円柱の下には立仏がある。大殿の蓮座の後ろの仏台には巨大な睡仏が頭を東にして、右手を頭の下に枕し、静かに横たわっているが、この睡仏は木胎泥塑で長さ八メートル、高さ一・五メートルあるという。

寺名が石鐘寺とつけられたのは、伝説によると、寺の左に水潭があり、その上の崖石を叩くと鐘のような音があるので石鐘寺とつけたという。雨花台は講經受戒の場所であり、石鐘閣には大藏經が貯蔵されている。大雄宝殿の東側には方丈室と住宿の小院が、西側には僧侶が住する静室がある。寺の外には菜園、りんご園、竹林などがある。

### 寂光寺

寂光寺は錦霞山麓にある。明の弘治年間（一四八八—一五〇五）花椒庵を創建したが、嘉靖初年（一五二二）、廃庵となったが、嘉靖三十七年（一五五八）、高僧本貼らが再建した。万暦年間（一五七三—一六一九）に高僧儒全が募化して重修、さらに天啓年間（一六二一—二七）、僧儒能が重修し、清の康熙二十八年（一六八九）、僧学産、通智が再建した。寂光寺の「寂」とは静寂の寂であり、「光」は光照の光である。

大雄宝殿は重層で、殿内に銅鑄の七仏如来像を祀る。七仏如来とは毘婆尸仏・尸棄仏・毘舍浮仏・拘留孫仏・拘那含牟尼仏・迦葉仏・釈迦牟尼仏をいうのである。大雄宝殿の右にある九年楼には藏經が貯えられ、また達摩の面壁像がある。達摩が面壁九年したので九年楼と名付けられた。

第四節「鷄足山の高僧」において詳述するが、明末の本貼、儒全、真澄、読徹、無住などがこの寂光寺より輩

出している。

寂光寺はもとは子孫叢林に属していたが、民国十一年（一九二二）、雲南省長唐繼堯が命じて十方叢林として名僧を招請することができるようになった。

### 聖峰寺

聖峰寺は鐘靈山の前にある尊勝塔院と相對している。明の嘉靖二十年（一五四一）、高僧淨月が開山建寺した。前に拱聖坊、後に玉皇閣があり、左には鏡光閣、右には觀音殿があつたが、清代に火災に遇つた。清の康熙二十三年（一六八四）僧寂佐により重修された。伝説によると、淨月が寺を創建した時、土中から石碑が出土、そこには迦葉入定の時、八明王が仏を讚えた歌頌が記されていたので明歌坪と古稱されたという。

一九五二年、一九六三年の二度にわたり、人民政府は出費修理したが、文化大革命で破壊されてしまった。

### 華嚴寺

華嚴寺は鶏足山の中峰の中の熊羆岡を背にし九重崖に面している寺で、明の嘉靖年間（一五二一—一六五）、僧の真円がこの地に庵を建て南京庵と呼んだのはじまる。その後、黔国公捐資命張、郭二総官が拡張して華嚴寺と稱した。寺内に沐公祠がある。明の万曆十八年（一五九〇）に大藏經が下賜された。万曆四十三年（一六一五）火災で焼失したが、僧海川が張拳・郭子榮の募化によって重修し、麗江土知府の木増が藏經閣を建造した。

清の順治十五年（一六五八）、再び火災で焼失したが、康熙十二年（一六七二）、僧照敏、照彦が江西の客商呉文華に募化して重建し、雲貴總督の蔡毓榮、巡撫の王繼文が扁額を書いた。

華嚴寺の大雄宝殿の中には華嚴三聖像の塑像があり、華嚴と密接な寺であることがわかる。

華嚴寺内にある沐公祠（黔国公祠）は、万暦年間に黔府（貴州省の知府）の張・郭両総官が、沐国公（木増）の命を奉じて華嚴寺を重修したので、沐国公の為に建てた長生祠が沐公祠である。

寺内には崇福楼、善住楼、去樓楼、弥陀殿などがある。境内には花木が繁茂し、寺の周囲は古木の林で覆われている。なお寺内に古い茶花（椿）の木が二株あるが、樹齡は二四〇年、清代の有名な茶花の木であるという。

### 伝衣寺

伝衣寺は鳳凰山の下にあり、石松崗を背にしている。明の弘治年間（一四八八―一五〇五）、僧性玄が円信庵を創立したのに始まり、嘉靖初年（一五二二）、李元陽が伝衣寺を建立した。禪宗では師から弟子に法を継承する時、衣鉢を相伝するが、それが伝衣寺の名の起りである。また迦葉尊者が守衣入定し、弥勒の下生を待った所にちなんで伝衣寺と称した。隆慶年間（一五六七―七二）、火災で廃寺となったが、万暦三十四年（一六〇六）、僧寂観が重建し、さらに清の康熙八年（一六六九）、僧心怡、源注が重修した。

伝衣寺の大門を入ると天王殿、大雄宝殿がある。大殿の前には雨花台があり、大香爐が置かれている。大殿の右の錦雲楼は藏経閣であり、楼前の古い茶花が開花の時は見事である。

寺門の外には大石坊があり、その真ん前に古松が蟠曲して横枝を四方に伸ばしている。石坊の上には明の王元翰（王圻）著書に『続文献通考』などがある。『明史』卷二百八十六、列伝第一百七十四）が書いた対联がある。それは、

花為伝心開錦綉

松知護法作虬竜

という文字である。

## 大覚寺

大覚寺は紫雲山の前面、万寿庵の上にある。明の嘉靖四十二年（一五六三）、寂光寺の高僧儒全が一小庵を建て、さらに万曆三年（一五七四）、姚安土官高鳳が捐資して覚雲寺を建てた。万曆八年（一五八〇）には姚安知府李贄が游山し寺内に住し、さらに鉢孟庵に移住した。万曆十七年（一五八九）慈聖太后は湖北の僧本安、江蘇の僧福登に命じて『大蔵経』を寺に下賜、そのため蔵経楼として二観楼を建てた。二観とは天台教学で説く事観と理観の意味である。万曆三十年（一六〇二）、高僧可全が寺を拡張、寺名を大覚寺とした。

大殿の屋頂は琉璃瓦を使用したため、金光に輝き、庭には山茶、杜鵑が多い。有名な旅行家の徐霞客もこの寺を訪ねている。文革時に破壊された。

## 悉檀寺

悉檀寺は満月山下の大竜潭上にあり、石鼓峰を背にした寺である。明の万曆四十五年（一六一七）、麗江土知府（土知府は広西・四川・雲南省の地方長官）の木増が母親の求寿の為に創建した寺で高僧釈禅を招いて住持とした。

釈禅の『楞嚴懺法』は『依楞嚴究竟事懺』巻上下として大日本統蔵経第二編、礼懺部乙第二套第一冊の中に収録されている。それには「南中鷄足山悉檀寺沙門釈禅修述」と記されている。

悉檀寺は「祝国悉檀禅寺」の勅額を下賜されたが、清の崇禎四年（一六三一）、木増の子の木懿が寺院を重修、殿宇を壮麗にし「一山の冠」と称せられた。崇禎十二年（一六三九）には、有名な地理学者徐霞客が悉檀寺に数か月滞在したという。



悉檀寺の大雄宝殿の西側に木太守祠がある。木増は悉檀寺を建立したほか、先に述べたように華嚴寺の藏経閣や、九重崖に一衲軒を、文筆山に尊勝塔院を建てた。鶏足山の寺院修建の功德の最大な功労者が木増であった。そこで悉檀寺の寺僧が木太守祠を建てて木増の塑像を祀ったのである。この祠の中には『木氏家譜』がある。

その他鶏足山の中には竜華寺、三摩寺、雷音寺、碧雲寺、放光寺、拈花寺などがあつたが文化大革命の時に廃毀された。なお鶏足山中に存在した西竺寺、千仏寺、接待寺、首伝寺、蘭陀寺、西来寺、祝国寺、白雲寺、法明寺、燃灯寺、隆祥寺、円通寺、観音寺、報恩寺、羅漢寺、覚靈寺、大聖寺、広恩寺、翔竜寺、白鹿寺、威音寺、懷恩寺、慈聖寺、牟尼寺、吉祥寺などもすでに廃毀されている。

### 慧灯庵

鶏足山には多くの庵があるが有名なのは慧灯庵である。慧灯庵は弥勒院の西にある。明の万曆三十三年（一六〇五）、僧洪平がここに草庵を結び、その門徒の普現が拡大し、さらに清の康熙二十一年（一六九二）、僧宗海が重修した。

文革時廃毀されたが、一九八三年、政府は大雄宝殿、方丈室、僧房などを再建した。大殿内には釈迦仏、達摩、関帝が祀られている。関帝が祀られているのは、関雲長が死後、玉泉山<sup>10</sup>に現われ、天台智者大師の受戒を受けたので、仏教の護法伽藍神として祀られるようになったためである。

庵の背後には樹齡二百四十年の古い茶花が一株ある。

### 弥勒院

弥勒院は慧灯庵の左にある。創建は古いといわれているが、明の永曆元年（一六四七）僧正用が庵の跡に重建し、清の康熙十五年（一六七六）、僧学融が重修した。大殿の中には弥勒仏の塑像が祀られている。文革時に廃毀された。

### 尊勝塔院

尊勝塔院は鷄足山の左支脈が尽きる所にある。明の崇禎十一年（一六三八）、麗江土知府木靖と悉檀寺の僧道源、道真が創建した。院中にチベット仏教式の尊勝塔が建てられている。この塔は高さ二十二メートル、塔身は円形、外側に石灰を塗っているので白玉の塔のように見える。「塔院秋月」は鷄足八景の一つである。

塔院の四周には禅房があり、僧の参禅の場所となっている。また院の中に二千余斤の銅鑄の大鐘がある。文革時、廃毀されたが、政府によって修復されている。

その他、円浄庵、牟尼庵、万寿庵、法雲院、大智庵、八角庵、水月庵、観音閣、大悲閣などがあつたが、そのほとんどは文化大革命の時期に毀されている。

さらに山中には、片雲居、白雲居、古雪斎、罔措斎、息陽軒、菩提場、法界庵、無我庵、大乘庵、大士庵、浄覚庵、極楽庵、宝蓮庵、柳雲庵、法華庵、靈源庵、妙覚庵、天竺庵、慧靈庵、雲海庵、無住庵、凌霄庵、海会庵、積行庵、浄雲庵、円通庵、弥陀庵、万松庵、般若庵、慈雲庵、開化庵、雲溪庵、白石庵、金華庵、伏虎庵、曹溪庵、功德庵、藏頭庵、兜率庵、観音庵、宝蔵庵、円覚庵、瀑布庵、浄土庵、慈聖庵、大力庵、水露庵、奉真庵、盤竜庵、獅子庵、東鳩庵、継周庵、祇国庵、水勝庵など多くの草庵があつたが、そのほとんどはすでに廃毀され

てしまった。

そのほか鷄足山には羅漢壁の静室、梅檀林の静室、獅子林の静室、九重崖の静室など多くの静室や、亭、坊、廟なども多い。その中の靈山一会坊と土主廟について一言述べておこう。

靈山一会坊は山麓の土主廟の左後方にある。明の万曆三十一年（一六〇三）、直指使宋興祖が建立し、清の康熙二年（一六六三）、僧真宜が重修した。文革時廃毀されたが、一九八五年、政府は原址に旧貌通り復元重修した。土主廟は靈山一会坊の西側にあり、下土主廟、大廟ともいわれている。

土主はもと迦葉殿に祀られていたが、参拝者の多くは廟内において土主に酒肉を捧げて祀ることが多かった。明の万曆年間（一五七三—一六一九）、陝西省の僧が来山し、鷄足山は迦葉道場であることを知り、犠牲や酒で名山を汚すことを恐れ、土主を山麓に移すことになった。これ以後、春節や香会の時、参拝入山する者はすべて齋戒沐浴しなければならなくなった。下山して土主を信奉するものは、この土主廟の中で、葷を食したり、肉を煮たりして、三牲酒醴を土主に供献した。神に供献する場所には鷄の血が淋漓としてたたっていたという。

土主廟の大殿には土主神の塑像が安置されている。文革時に毀されたが、一九八〇年に復興された。廟にはそのほか上土主廟、中土主廟など多くの土主廟があったが、今はほとんど廃毀されてしまった。

#### 四 鷄足山の高僧

明の錢邦纂、清の范承勳増修の清の康熙三十一年刊本の『鷄足山志』の目次によると、卷六「人物」の中に「禪僧」として次のような僧名があげられている。

(唐) 古和尚

(宋) 慈濟

(元) 源空、普通、本源

(明) 宗璵、浄月、実庵、性玄、圓惺、

本帖、如正、眞圓、匾困、圓清、

天心、太空、法光、悟月、如堂、

周堂、徳在、眞語、如唐、明鑑、

儒全、本安、如満、可全、幻空、

南嵩、清虚、眞澄、寂観、慧光、

釈禅、澹虚、儒施、広慧、尽玄、

如桂、周理、読徹、洪相、如常、

眞懐、文璽、眞利、来秀、寂定、

周続、印寛、慧鑑、洪如、

そのほか「高隠」の条に、徳心、雪影、洪度などの僧名が、また「名賢」の条には、洪舒、学蘊、普行、浄極、読体、普勻、悟禎、悟澄、周壁、洪敬、洪質、普見などの名が見える。これらの鶏足山に住した僧の中から名僧を選んでその行実を述べてみたい。

鶏足山は明の嘉靖（一五二二—一五六五）から万曆（一五七三—一六一九）の約百年間の間、明の政府が仏教を重視した政策をとったり、地方官吏の護法の精神や僧の仏教布教の熱意によって、山中に大小寺院が建立されたことは前節で述べた通りである。国内各地から多くの僧が来山し山中に草庵を結んで苦修錬行したり、講経説法したり、仏学を研究したり、四方に募化したり、雲游行化したりしたので、鶏足山には多くの高僧が輩出したのである。

その上、南明の永歴帝（朱由榔、一六二三—一六六二）が雲南に駐在したこともあり、雲南は一時的にもせよ当時の政治の中心となり、文化人や高僧が雲南の地に集ったのである。鶏足山に高僧が雲集したのも由なしとしない。

『鶏足山志』に出てくる唐の古和尚と宋の慈濟は伝説の人に近く、実際に名僧が活躍するのは元代以後である。なお、鶏足山の高僧の伝記を記すにあたって、賓川県志編纂委員会編『鶏足山誌』（雲南人民出版社、一九九一年六月）、及び陳垣撰『明李溟黔仏教考』（中華書局、一九八九年四月）の二書を参考とした。記して感謝の意を表する次第である。

### 普通

普通は号は徳存、元末の趙州の人、幼年にして鶏足山に入って出家した。曾て楚雄の普福と永昌の道元と共に浙江省の天目山に行き中峰和尚（中峰明本、一二六三—一三三三）に求法問道した。

『中峰広録』卷二十七に「即心庵歌」があり、その中で、

雲南福、元、通の三上人、遠く万里を逾えて余の窮山を訪れ、坐夏未だ了せざるに、故郷に帰らんと欲し、菴を結んで禅居と為し、以て己事を究明することを凶らんとし、預め乞いて菴の為に立名せんとす。余、即心の二字を以て之を示す。蓋し大梅常和尚、馬祖に参じ即心是仏を聞き、一に空山に住し、誓って再び出でず。既に志、住庵に有り、当に古風を追い、以て茅躅を継ぐ、庶幾は吾が道の望有ることなり。<sup>(11)</sup>

と述べている。雲南より福、元、通の三上人が中峰の下に来たが、故郷に帰り草庵を結ぶ意志があり、その庵名を中峰に求めたところ中峰は「即心」庵とせよと教えた。

この中の福、元、通の三上人の中の通上人こそ普通にほかならない。普通らは中峰の画像を描いて雲南に帰つ

たところ、中慶城（昆明）に至ると、四衆が像を迎えて入城し、香火が絶えることがなかった。これより雲南に禅宗が興ったので中峰を雲南禅宗の第一祖とした。普通は鷄足山に帰った後、茅を山中に結び、中峰の「一住空山、孤行苦修、誓不再生」の教えを守って、鷄足山の中に禅宗を建立したのである。

### 本帖

本帖（一五一六―七〇）は、号は定堂、俗名は揚氏、雲南楊林の人である。二十歳の時、「雪山偈」を聞いて深く感動し、志を立てて出家し、瑤玲山（秀嵩山）に往き、白斎和尚を拜して剃度して弟子となった。白斎の門弟百余人の中で聰明なること本帖が誰よりも傑出していた。具足戒を受けた後、誓を立てて禅を学んだ。出家して二十余年、夜は必ず結跏趺坐して参禅した。蟠竜寺に前代の大師が伝えた仏法の儀式があることを聞いてそこへ往きその儀礼を学習した。禅に打ちこむこと三年一日の如くであった。

後、鷄足山に帰り、金竜潭に金竜庵を建てて徒衆を接化した。三年後に錦霞山麓に梅檀林を背にした花椒庵を建て、さらに嘉靖三十七年（一五五八）、寂光寺を建てた。その後、蒼山三塔寺に到って『楞嚴経』を講じたが、官吏や文人から深く尊敬された。また『楞嚴会解』を刻して三塔寺に蔵さしめた。弟子の興徹、海慧、興叢らは当時の名僧であった。李元陽と趙雪屏が、大理に留まることを要請したが、昆明の清水塘に帰り、弥勒庵を結んだ。

隆慶四年（一五七〇）十二月、本帖は坐化し骨を鷄足山に迎え、塔を寂光寺の右側に建てた。享年五十四歳、僧臘三十五であった。李元陽が塔銘を選したが、その中で「師為人剛直簡易、早得無念法門。雲南自古庭之后、得道可数、師其一也」と記した。雲南において古庭善堅（生没年不詳）の後、真に道を得た一人こそ本帖であると賞讃している。

ちなみに古庭善堅は昆明の出身、俗姓は丁氏、十九歳にして柏巖に参じた。宣徳五年（一四三〇）金陵に往き、無隠遁に参じた。正統年間（一四三六―四九）隆恩寺の無際明悟の法を嗣いだ。金台（河北省）の大容山や金陵の天界寺に住したり、桐浮山（安徽省）に入山したりした。著書に『山雲水石集』がある（『五灯全書』卷五九）。なお、本帖が『楞嚴経』を講じた蒼山三塔とは有名な大理の三塔寺であり、鷄足山と洱海を隔てて相い対しているところにある。

### 儒全

儒全（一五四五―一六〇九）、字は用周、晋寧の人、俗姓は杜氏、水月庵に住したので水月と号した。初め儒書を学び、遍ねく諸書を閲覧した。後に『般若経』を読み、「凡所有相、皆是虚妄」の語を見出して省ありという。万暦年間（一五七三―一六一九）、古林和尚を拜して師として剃髪出家した。その後、名山を雲游して善知識に参じ求法問答した。まず蕩山寺の印光、秀松、接天の諸僧を訪ね、さらに湖北省において遍融に拜謁し、華嚴の奥旨を学んだ。貴州の雲霧山に登り無窮和尚に謁し「一念不生、而全体現」の印証をもらった。峨眉山の四会亭に至り、琉璃三昧を得て胸中明徹し経文、教義を体得することができた。

邵甸普賢寺において閉関参禅していた時、羅近溪が儒全の下を訪れて鷄足山寂光寺の住持として迎えた。

儒全は鷄足山に上山すると、楞嚴講座を開き宗風大いに振った。来訪する官吏、文人、信士は儒全を敬服して寺院興建のための捐資に協力した。

たとえば直指使宋興祖は莊田を寄附し、靈山一会坊、清涼閣を建て、直指使沈正隆は大士閣を修建した。

儒全は生活は淡泊、冬夏に拘らず、身に一衲を穿けるのみであり、所得の信施はことごとく寺院の増建、寺田の購入、経書の印行のみに使用したという。弟子に蒼雪、野愚らの高僧が輩出した。

万曆三十七年（一六〇九）に没したが六十四歳であった。塔を寂光寺の後に建て、昆明の伝宗竜が「寂光寺用周禪師道行碑記」を撰した。

### 読徹

儒全の高弟に読徹（一五八八—一六五六）がある。読徹は字は見曉、俗姓は趙、南来とも号した。蒼雪大師と呼ばれ詩人としても有名な読徹は、本来は華嚴学者であった。錢謙益の『有学集補』に収録されている「中峰蒼雪法師塔銘」には、つぎのように記されている。

清涼の一宗、長水晋源自り、絶えざること綫の如し。勝国の時、滇南、蒼山再光（寺普）瑞師、華嚴懸談を表明し、『会玄記』を修して關鍵啓鑰し、蔚として教宗を為す。万曆中、蒼雪法師、滇より呉に適き、法を巢・雨に得て雪浪の玄孫たり。一灯再び焰えさかり、人は滇南万里、邈かなること天涯の若しと謂うも、（12）兩師代りて興り、交光繼照す。豈に華嚴法界中の分身、踵を接し願に乗じ、輪として至るに非ざらんや。

これによると、清涼の一宗は、長水子璿、晋水浄源より読徹に至るまで法脈が繼承されたという。元代には普瑞が出現、明代には読徹が華嚴学を盛んにした。読徹は華嚴を一雨通潤と巢松通浸に学んだが、この二人の師は雪浪洪恩（一五四五—一六〇七）であった。読徹は雪浪洪恩の孫弟子にあたる。彼は幼少より鷄足山の水月道人に師事して沙弥となった。十九歳、各地を遊学、天衣より『楞嚴経』を学び、雲棲より十戒を、古心律師より満分戒を受けた。華嚴については、初めは洪恩に師事、洪恩没するや弟子の通潤と通浸に学んだ。後、見月律師の招請で宝華山において『楞嚴経』を講じた。周知のように宝華山は、江蘇省句容県の西北にある海拔三九六メートルの山で、南朝の宝誌が開いた山といわれている。清代以後、宝華山は全国の授戒寺の一つに指定され、戒律の道場として有名であり台湾や東南アジアの僧も授戒のためこの山を訪れている。読徹はこの宝華山の講義の途



中で病いを発し、この地で没した。

なお、蒼雪大師の詳細な年譜は「蒼雪大師行年考略」(王培孫先生註『南来堂詩集』〈附年譜〉 新文豊出版公司、民国七十二一年一月)を見て頂きたいと思う。

### 釈禪

儒全の後に輩出したのが釈禪(一五七七—一六三二)である。釈禪は字は本無、昆明の張氏の出身。妙空和尚を師として剃髪し、具足戒を大方和尚より受け、所庵法師に得法して後、鶏足山に住し、経蔵を研究すること二十余年、『肇論』に精通した。一六一七年、麗江土知府木増が悉檀寺を建立し、釈禪を開山とした。釈禪は僧録左善世に任せられ紫衣を賜った。著書に『楞嚴懺法』『風響集』『因明論随解標釈』『老子玄覽』『禅宗賛頌』がある。明の徐霞客の『滇游日記』巻六の巳卯正月十一日の条に、釈禪の弟子、弘弁と安仁が、釈禪の著書をとりにだして徐霞客に見せたことが記されている。

### 周理

釈禪と同時の人に周理(一五九一—?)がある。字は徹庸、雲南県杜氏の出身。十一歳の時、鶏足山大覚寺に入り遍周を師とした。その後、鶏足山と姚安の間を往来して姚安の密蔵和尚に参禅した。後、『古庭録』を得て研究し、深く自得するものがあった。

後に、密雲和尚が浙江の天竜山で説法しているので天竜山に行って教えを受けて莫逆の交りをおこなった。その後、妙峰山において開堂説法し、初学者と接化するに当り一棒一喝の峻烈な家風で接した。晩年、妙峰山に住して『曹溪一滴』及び『語録』を書いた。

## 学蘊

学蘊は字は知空、洱海衛（祥雲県）の人、俗姓は王氏。十歳の時、鷄足山に入り、水月和尚に投じて剃髪し弟子となった。寂光寺に住し戒律を精修した。

## 大錯

大錯（一六〇二—一七三三）、俗姓は錢氏、字は開少、名は邦芑、江蘇省鎮江の人である。万曆の進士、崇禎末年（一六四四）、官は雲南巡撫となり永歴帝に仕えて殊勲があった。帝がビルマ（現ミャンマー）に奔るや追隨せず、鷄足山に入山し僧となった。潜心して参究し、本源を了悟した。後に滇、蜀、湘、貴の間を往来し講説に努めた。晩年は衡岳に入って茅を結んで寂した。著作に『大錯和尚遺集』四卷、『梅柳詩合刻』一卷、『鷄足山志』十卷がある。

## 虚雲

近代において鷄足山を復興させた名僧は虚雲（一八四〇—一九五九）である。虚雲は十方道場を重建、護国祝聖寺を再建した。『楞嚴経』を開講し、戒法を弘めたため、帰依者数万人といわれた。虚雲の生涯やその業績については釈東初著『中国仏教近代史』<sup>13</sup>の第二十四章「緇衆研究仏学之成果（上）」の第九節「釈虚雲与釈来果」を参照すればよい。それによって簡単に伝記を述べよう。

虚雲は諱は古巖、字は徳清、別に虚雲と号した。俗姓は蕭氏、父の名は玉堂公、母は顔氏といった。原籍は湖南省湘郷である。道光二十年（一八四〇）、泉州に生まれた。民国四十八年（一九五九）に江西省の雲居に寂した。

世寿百二十歳であつた。

咸豊八年（一八五八）、十九歳の時、鼓山湧泉寺の常開老人を礼して剃髪した。次の年、鼓山妙蓮和尚によって具足戒を受けた。これより行脚して参訪学道した。三十一歳で、天台融鏡老法師に学び、三十六歳で高明寺に至り、敏曦法師の『法華経』の講義を聴いた。三十七歳の時、天童寺に至って『楞嚴』を聴講した。四十三歳、五台山に往き、父母の深恩に報じた。光緒八年（一八八二）七月一日、浙江普陀山の法華庵に起香し、三步一拝の礼拝行をした。光緒十年（一八八四）五月下旬、始めて五台山の顯通寺に拝し、歷經すること三年、饑寒のため三回大病したが在山すること三年、四十八歳の二月下山し、翠微の皇裕寺に至った。ついで鳩摩羅什道場や太白山を歴遊し、漢中に至って、漢の高祖の拜将台や諸葛廟、張飛の万年灯などに参拝した。

さらに劍門関をへて、四川新都県の宝光寺に至った。四十九歳で成都に入り、文殊院に礼し、峨眉山に至った。さらに西行して、北は察木多に至り、西は拉里に及んだ。烏蘇山を過ぎ、拉薩河を越え、西藏に入り、拉薩（ラツサ）に至り、西北の布達拉山に行き十三層の布達拉（ポタラ）宮に上った。そこにはラマ僧二万余人がいた。又、西行して貢嘎（ゴンガル）、江孜（ギャンツエ）を経て日喀則（シカツエ）に至り、西の札什倫布（タシルンポ）に行った。そこにはラマ僧約五千人がいた。五十歳の時南行して、拉噶、亜東を経て、インドに入り、揚甫城に至って仏の古跡を朝した。さらに錫蘭に渡りビルマ（現ミャンマー）に入り大金塔を参拝した。七月の初めに帰り、漢竜関を過ぎて大理に至り、鷄足山を朝拝した。迦葉尊者の入定処を礼して、忽ちに大鐘自ら三声を鳴らすを聞いた。土人いちいち歓呼して礼拝した。

多年にわたって虚雲は名山大川を参訪したが、三衣一鉢で独行し、毫も繫累は無かった。山野を跋涉したため体力増強し、歩行は軽捷となり、一代の人天の師表に成ることができた。五十三歳で普照、月霞、印蓮諸師とともに、九華山に同住して五教義を弘めた。かくして『賢首経』『華嚴経』を研究すること三年であつた。五十六歳、

江蘇の高旻寺に住し、臘月一日、夜晚の放香時に開眼して忽ち大光明を見て、内外洞澈して壁を隔てて、遠く河中の行船や兩岸の樹木を見ることができた。出家してから五十六歳に至って開悟したが、この三十七年は余りにも長い歲月であり、その艱難辛苦を尽した結果、開悟の喜びを味わうことができた。

五十九歳、寧波の阿育王寺において『法華経』を講じた。六十一歳、再度五台山を参訪し、五岳の諸名山を廻った。六十三歳、昆明の福興寺に在って閉関した。六十五歳、出関して帰化寺に至り『円覚経』『四十二章経』を講じた。帰依者三千余人という。是の年の秋、筇竹寺に在って『楞嚴経』を講じた。またその寺で伝戒を一期つとめたが、伝戒が畢つて、大理の崇聖寺に至り『法華経』を講じ、帰依者数千人という。帰依者の募化によって鷄足山の迦葉道場を復興した。虚雲は鷄足山を回つて、房屋を興建し、規約を定め、坐禅、講経し、律儀を重んじて受戒法を伝えた。是の年四衆の戒を求める者七百余人という。

六十六歳、石鐘寺で伝戒し、求むる戒者八百余人であった。是の年弘化のために南洋に往き、南甸の太平寺に至り『弥陀経』を講じた。又檳榔（ペナン）に至つて『法華経』を講じた。マラッカに至つて『薬師経』を講じ、クアランプールに到つて『楞嚴経』を講じたが、この前後の帰依者万余人という。

六十七歳、南洋より帰国して、船で台湾を経て、基隆の靈泉寺に参訪した。六十八歳、丹那に到つて『心経』を講じ、泰国に到つて『地藏経』『普門品』『起信論』を講じた。六十九歳、再び檳榔嶼の極楽寺に『起信論』『行願品』を講じ、帰依者は甚だ多かつた。是の年ペナン島の極楽寺で閉関し、出関後に帰国した。七十二歳で鷄足山に在て伝戒し、禅を結ぶこと四十九日、提唱し坐香し夏安居した。八十歳、雲南總督唐繼堯の礼請に依じて、昆明に赴き忠烈寺において水陸道場を啓建した。四十九日を経て円満し、全場の蠟燭は尽く蓮花を開き、聖を送る時、空中に幢幡、宝蓋が出現して雲中にただよい、民衆はすべて地に拝した。法会が畢ると、講経を継続し、壇を設けるや降雪し、さらに華亭寺（雲棲寺）を重修した。八十四歳、七衆海会塔を修建し、八十五歳、金山の

祖塔および七錦塔を重修した。八十六歳から八十八歳の間、春戒後、雲棲寺に在って講経したが、殿前の老梅の枯枝より忽ちに白蓮花数十朶が生じたという。八十九歳、福建の鼓山の住持となった。

九十五歳の時、六祖道場である曹溪南華寺を重修した。九十六歳、香港東華三院の招聘に応じて香港に赴き、水陸道場を啓建した。九十七歳から百三歳の間は南華寺に在って伝戒講経した。百四歳、重慶より南華に回り、次の年六祖道場を重修した。曲江、乳源各地をめぐり靈樹道場を訪尋した。北の雲門寺に到り、荊棘叢中の残存古寺を見て、雲門の開宗道場のために、修復を決心して経営すること数載、漸く旧觀を復した。

一九五四年春、百十五歳、江西永修県の雲居山に赴き、真如寺を復興し、唐代の旧觀を恢復させた。一九五九年百二十歳、世縁已に尽き、この秋農曆九月十三日に寂した。海内外の仏門の弟子追念せざるものなかつた。

以上の虚雲の事蹟は、蘇芬居士所編の『虚雲老和尚事略』に拠つたという。

虚雲が鷄足山に入山したのは、六十三歳以後であるが、清の光緒十五年（一八八九）と光緒二十八年（一九〇二）の二度にわたつて鷄足山に上山し、迦葉尊者を朝礼し、この時虚雲は一茅庵を結び、開単して朝山の僧侶を接待した。光緒三十年（一九〇四）、大理提督張松林、李福興らの要請で、虚雲は大理崇聖寺の住持となつたが、城市に居住することを願わず、鷄足山に住み、迦葉道場の復興に努めた。当時の賓川知州は鉢孟庵（又の名迎祥寺）に虚雲を居住させた。鉢孟庵は嘉慶（一七九六—一八二〇）後無人の寺となり、殿宇は荒廢、瓦は落ち、荒れ果てていた。これを見た虚雲は寺の拡張、十方叢林の創立、開単接衆、迦葉道場の恢復を發願した。

寺院を建築するには大量の資金が必要である。虚雲は修寺のために募化に努めた。山中の寺院も虚雲の影響を受けて、改革を始め、僧衣を着し、素菜を吃し、上殿、挂単した。虚雲は南洋、ビルマ、クアラルンプール、台湾、日本にまで行脚募化に努め、帰国して北京に到り、清蔵の下賜を奏請した。清朝政府は『竜蔵』を欽賜し、鉢孟庵迎祥寺に『護国祝聖寺』の勅額と、虚雲に紫衣鉢、玉印、錫杖などが下賜され、仏慈宏法大師号を賜つ

た。

こうして祝聖寺が建成し、鷄足山第一座の十方叢林が開創した。国内外の僧侶や旅游人士が参集し、衰落していた迦葉道場も再び活気を取り戻すに至った。

虚雲こそ鷄足山に住すること前後一五年、近代において鷄足山の復興に貢献最大であった高僧であった。その後虚雲は昆明に到り、華亭寺の住持をすること二年、民国十九年（一九三〇）、雲南を離れた。虚雲の一生は、経歴すること十五座道場、六大名刹を中興し、重建した大小寺院庵室は八〇余座に及んだ。

### 自性

自性（一八八八—一九六九）、字は光明、雲南鎮雄の人である。俗姓は李氏、名は福隆。幼年の在家の時『小学』を読み、十五歳で昆明の武備学校に入った。一九〇七年学校は「雲南講武堂」と改名した。卒業後武職に任せられた。民国二年（一九一三）、貴州丹霞山護国寺において妙相を師とし剃髪して僧となった。その後、国内名山を游歴し、師友を訪ね問法した。

民国一三年（一九二四）、俊考和尚に随って、ビルマ、インド、スリランカ等を歴訪朝仏した。

民国一六年（一九二七）、太虚に随って、円瑛等一八人とインドの靈鷲山、セイロン（現スリランカ）、クアラ Lumpur、シンガポールなどを歴訪した。

民国三四年（一九四五）、鷄足山祝聖寺の住持であった懷空が老年で多病のため、しばしば辞任したいといっていた。雲南省仏教会は祝聖寺は滇西著名の古刹であるため、自性が戒行を修し、仏学にも博く、重任を承担することができるので、特に祝聖寺住持に任じた。

自性は祝聖寺住持になってから、仏門の規戒を整え、上殿功課、誦経拝懺に努めた。且つ、親しく江西景德鎮

に到り、瓷器一車を募化して帰山したが、常に下山募化の功德によって、寺院の修理に努めた。体力を必要とする労働にも、自ら徒弟らと親しく、柴を背負って山を登り、年老いても衰えることがなかった。

自性は出身が軍人であったため身体壮健であり、拳撃を善くした。音声は宏亮としていた。深く仏理に通じ、全山の僧徒の崇敬を受けていた。

民国三七年（一九四八）、自性は祝聖寺で伝戒法会を挙行した。開放後も祝聖寺住持を続任し、一九五三年鶏足山仏教理事會委員、州政協委員、省政協委員に任ぜられた。

一九六六年、文化大革命が開始されると、鶏足山の和尚は下山させられ下放された。自性は年老い体弱であったため力角の円覚寺に配置され生活費を支給されたが、一九六九年円覚寺に於て入寂、鶏足山に葬られた。

## 五 結言

以上、鶏足山の寺院と高僧について述べきたったが、鶏足山は明代以後、急速に発展した仏教聖地であったといえよう。その点、五台山、峨眉山、九華山、普陀山などの四大聖地より時代を後にして発展した聖地なのである。

しかし、鶏足山は民国時代になると、十方叢林としての規矩も失なわれ、戒律もまた遵守されなくなり、墮落した山林仏教であったが、虚雲や自性らの寺院再建の募化が実り、多くの伽藍が昔日の面影をとりもどしたのであった。不幸にも文化大革命の打撃を受けたが、国家、省、県などの援助や、僧侶の復興への貢献と相俟って現在のような仏教聖地となったのである。

中国の南西部の仏教聖地には鶏足山のみでなく梵浄山もある。梵浄山は貴州省東北の印江、松桃、江口の三県の接する地点に位置する。武陵山脈の主峰であり、海拔二五七二メートルある。山上に多くの梵宇（仏教寺院）

があるので梵浄山といわれた。山の形は下が小さく上が大きいので俗称、飯甑（瓦で造った炊煮の器）といわれた。明の万暦年間（一五七三—一六一五）仏教道場となり、寺廟が星羅し、香火は極めて旺盛であった。毎年四月香会の期間には、四川、湖南、湖北、江西及び貴州省各地からの朝山進香者が絶えなかつた。近代になると廟宇は毀廢し、わずかに保存されたのは北坡の山麓の太平寺と天慶寺など少数の廟宇であった。しかし、その遺址や摩崖石刻からみれば仏教名山であったことは明らかであり、旧時の繁栄を想像することができる。その上、この山には植物が繁茂し、溪流飛流があり、環境は清幽であり、まさしく仏教名山といえることができる。一九七八年には国家重点自然保護区となり、中国の亜熱帯の珍しい原生物が多くあり、世界的な珍貴な中国第一級の保護動物の金糸猴や紅腹角雉、麝、雲豹、華南虎、獼猴などの珍禽珍獣もいるという。

主要な名勝には、大小金頂、拝仏台、説法台、煉丹台、香爐峰、薄刀嶺、藏經岩、棉絮嶺、九竜池、定心池、太子石等がある。梵浄山の中心景観は金頂附近であり、海拔二二二六米の金頂の突兀とした山頂は石柱のようであり、四面には絶壁がある。

この梵浄山は雲南省の隣りの貴州省にあるが、このように鷄足山、梵浄山などの仏教聖地が明代に開かれたことは大きな意味がある。中国の明代仏教史などは日本人の関心外にあるが、現在の中国仏教を知るためにも、鷄足山や梵浄山の仏教を知る必要があることを銘記しなければならない。

## 注

(1) 『高僧法顯伝』（大正五十一・八六三下—四上）

從此南三里到一山名鷄足。大迦葉今在此山中。擘山下人入處不容。人下入極遠有旁孔。迦葉全身在此中住。孔外有迦葉本洗手土。彼方人若頭痛者。以此土塗之即差。此山中即日故有諸羅漢住彼。諸國道人年年住供養迦葉。心濃至者夜



卽有羅漢來共言。論釋其疑已忽然不現。此山榛木茂盛。又多師子虎狼。不可妄行。

(2) 『大唐西域記』卷九(大正五十一·九一九中)

莫訶河東入大林野。行百餘里至屈屈播陀山(唐言雞足)。亦謂窶廬播陀山(唐言足)。高巒隙無極深壑洞無涯。山麓谿澗喬林羅谷。岡岑嶺嶂繁草被巖。峻起三峯傍挺絕嶠。氣將天接。形與雲同。其後尊者大迦葉波。居中寂滅不敢指言。故云尊足。

(3) 『增壹阿含經』卷三、弟子品第四(大正二·五五七中)

十二頭陀難得之行。所謂大迦葉比丘是。

(4) 『雜阿含經』卷四十一(大正二·三〇二上)

如是我聞。一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園爾時尊者摩訶迦葉。久住舍衛國阿練若床坐處。長鬚髮著弊納衣。來詣佛所。爾時世尊無數大衆圍繞說法。時諸比丘見摩訶迦葉從遠而來。見已於尊者摩訶迦葉所。起輕慢心言。此何等比丘。衣服麤陋。無有儀容而來。衣服佯佯而來。爾時世尊知諸比丘心之所念。告摩訶迦葉。善來迦葉於此半座我今竟知。誰先出家。汝耶我耶。彼諸比丘心生恐怖身毛皆豎並相謂言。奇哉尊者。彼尊者摩訶迦葉大德大力。

(5) 『聯灯会要』卷一(統藏經一三六·四四〇下)一上

世尊在靈山會上。拈花示衆。衆皆默然。唯迦葉破顏微笑。世尊云。吾有正法眼藏。涅槃妙心。實相無相。微妙法門。不立文字。教外別傳。付囑摩訶迦葉。

(6) 『大般涅槃經』卷二(大正十二·三七七下)

爾時佛告諸比丘。汝等不應作如是語。我今所有無上正法悉以付囑摩訶迦葉。是迦葉者。當為汝等作大依止。猶如如來為諸衆生作依止處。摩訶迦葉亦復如是。當為汝等作依止處。

(7) 『付法藏因緣傳』卷一(大正五十·三〇一上)

於是阿難共阿闍世王向雞足山。王既到已山自開闢。迦葉在中全身不散。曼陀羅花以覆其上。王見是已發聲號哭。舉身投地。積諸香木欲闍毘之。阿難問言。欲作何等。答欲耶旬。阿難言曰。摩訶迦葉以定住身待於彌勒。不可得燒。彌勒出時當將徒衆九十六億至此山上見於迦葉。時彌勒衆皆作是念。釈迦如來弟子身形卑陋若此。彼佛亦當與斯無異。於是

迦葉跣身虚空作十八變。變為大形充滿世界。時彌勒佛即就迦葉取僧伽梨。是時大眾見其神力。除憍慢心成阿羅漢。王供養已還歸本國。時雞足山還合如初。

(8) 『仏祖統紀』卷五（大正四十九・一七〇下）

即往雞足山取草敷座而餐三願。一願此身乃所持衣鉢。俱不壞待至慈氏下生。二願入滅盡定已。三峯合一。

三願阿難闍王若至。願山暫開。時闍王夢屋梁折。王覺已悲歎。即往雞足山見迦葉全身儼然在定。王發聲哀哭。積諸香木欲闍維之。阿難為言。迦葉以定住身以待彌勒不可得燒。王供養已還歸本國。山合如故。至慈氏三會之後。有無量憍慢衆生將登此山。慈氏彈指山峯即開。迦葉以所持衣授與慈氏。致辭禮敬畢。涌身虚空示諸神變。化火焚身乃入寂滅。

(9) 拙稿「華嚴三聖像の形成」（『印仏研』四十四卷二号、平成八年三月）

(10) 拙稿「玉泉寺攷」（『天台大師研究』一九九七年三月）

(11) 『中峯広録』卷二十七「即心菴歌」

雲南福、元、通三上人、遠逾萬里、訪余窮山、坐夏未了、欲歸故鄉、結菴為禪居、以圖究明已事、預乞為菴立名、余以即心二字示之。蓋大梅常和尚參馬祖、聞即心是佛、一住空山、誓不再出。既有志於住菴、當追古風、以繼芳躅、庶幾吾道之有望也。

(12) 「中峰蒼雪法師塔銘」（錢謙益『有學集補』）

清涼一宗自長水晉源、不絕如綫。勝國時、滇南蒼山再光瑞師、表明華嚴玄談、輯會玄記開鍵啓鑰、蔚為教宗萬曆中、蒼雪法師自滇適吳得法巢雨、為雪浪之元孫。一燈再焰人謂滇南萬里、嚴若天涯、兩師代興、交光繼照。豈井華嚴法界中分身、接踵乘願、輪而至者耶。

(13) 釈東初『中国仏教近代史下冊』（東初出版社、民国八十一年十二月、五刷）七八七—九五頁参照。